

最終報告書レポート

演劇作品「Whle」のためのPETAへのリサーチ研修の報告

・目次

I 本プロジェクトの概要

- ・目的
- ・主なスケジュール
- ・受入機関PETAについて
- ・受入協力者について

II PETAのワークショップ

- 1.レイテ島での活動 Lingap Sining プロジェクト
 - ・ Lingap Sining プロジェクトについて
 - ・ 8月12日 Young Artists Convergence のレポート
 - ・ 現地で行ったワークショップ報告 (プラスバンド、SATO)
2. PETA Weekend Workshop
3. ARTS Zone Project for Childrenの活動
4. HANDs! プロジェクトイベント
5. 現地で行ったワークショップ報告2 (国立芸術高校、PETA)
6. PETAの考える教育について

III フィリピンの社会

1. 日本とフィリピンのつながり、日本への移民について
 - ・ Michelleさん、Melvinさんへのインタビュー
 - ・ トンドへの訪問
 - ・ DAWNへの訪問
2. 戒厳令と現在の状況
 - ・ PETAのミュージカル「A Game of Trolls (GoT)」を鑑賞
 - ・ 戒厳令資料館を訪問
3. Sipat Lawin Ensembleのメンバーとの交流
 - ・ Sipat Lawin Ensembleの事務所訪問
 - ・ 先住民 Lakbayan Camp 参加

IV リサーチを終えて

V 今後のプロジェクトについて

I リサーチの概要と受け入れ機関

・リサーチ概要

外国にルーツを持つ子どもたちについての演劇作品を京都で作るため、フィリピンの劇団PETAへの研修、取材を1ヶ月間行った。山口が活動母体としているBRDGは近年、京都という町の「ローカルな国際性」をテーマに海外からの移住者へのインタビューを元に演劇作品を創作している。次なる企画では移住者の2世、3世へのリサーチを元にした演劇作品の創作を目指しており、京都市の特にフィリピンコミュニティを中心に交流を始めている。今回は若い世代への聞き取りやリサーチを試みたい為、創作者の利益になる活動だけではなく、対象のコミュニティにとっても有益になるような方法を取りながらリサーチを進める方法がないかと考え、長年にわたり多様なコミュニティと演劇を通して活動を継続しているフィリピンの劇団PETAでの研修、取材を行い、彼らがどのように様々なコミュニティに関わっているのかを視察した。また、京都で主な対象コミュニティのルーツとなる国であるフィリピンに滞在し、彼らの文化に触れること、日本との関係をフィリピン側から見ることによって、創作するに際して重要な視座を得ることができるのではと考えた。

今回のリサーチでは上記した当初の目的に加え、滞在を通してフィリピンの社会状況、フィリピンのアーティストと社会の関わり方を間近に見ることができ、私の住んでいる現在の日本とは大きく違う社会状況の中で、どのように人々やアーティストが社会と向き合っているのかを知ることができた。このことは、今後のBRDGの活動に大きな影響を与えていくのではないかと感じている。ここでは、現地で行った主な活動とその考察をまとめることで報告書とする。

8/10-11	マニラ、ケソン市	マニラ到着、PETAセンターにてオリエンテーション、リハーサル見学、打ち合わせ
8/12-13	レイテ島、パロ	PETA、Lingap Sining プロジェクトの活動に同行 Young Artists Convergenceに参加
8/14	レイテ島	ポーフランス村見学、入居予定者へのインタビュー
8/15	レイテ島、パロ	パロ見学、パロのブラスバンドの生徒たちとワークショップ、ホームステイ
8/16	レイテ島、パロ	小学校見学、影絵グループとワークショップ、ホームステイ
8/18-20	マニラ、ケソン市	PETAの週末のワークショップ見学、PETAメンバーへのインタビュー
8/21	マニラ、ケソン市	Michelle Ongさんへのインタビュー
8/22	マニラ、ケソン市	「A Game of Trolls」記者会見、演出Maribel にインタビュー
8/23、8/24	マニラ、ケソン市	Sipat Lawin Ensembleの事務所訪問、インタビュー
8/24-25	マニラ、パシグ市	PETA、ART ZONEプロジェクトのワークショップに同行
8/26	マニラ、ナボトス市	HANDS! プロジェクトのイベント参加
8/30	マキリン	国立芸術高校見学、演劇コースの学生へワークショップ開催
8/31	マニラ市	ラモン・マグサイサイ賞授賞式出席
9/1	マニラ、マカティ市	Melvin Jabarさんへのインタビュー
9/2	マニラ、トンド市	HPN3の堀越さんによる案内でトンド地域訪問
9/4	マニラ、ケソン市	フィリピン大学Michelle Ongさん研究室訪問、Lakbayan キャンプ見学
9/5	マニラ市	こども博物館訪問、面会
9/6	マニラ、マカティ市	DAWN事務所訪問、面会
9/8	マニラ、ケソン市	PETAアーティストティーチャーへのワークショップ開催
9/9	マニラ市	2017 International Studies Conference に出席

・主な活動スケジュール

・受入機関：PETAについて

PETA (Philippines Educational Theatre Association) は1967年からフィリピンのマニラで活動する劇団。演劇を通して人々と社会の発展を目指し活動している。50周年を迎えた2017年、アジアのノーベル平和賞と言われる、ラモン・マグサイサイ賞を受賞。現在のPETAの活動は主に三つの部門に分けられる：1. **Theatre for Artistic Development (芸術発展のための演劇)**、2. **Theatre in Education (教育現場での演劇)**、3. **Theatre for Development (発展のための演劇)**。今回は、PETAの基本的な理念と共に、BRDGの次回企画の趣旨に近いTheatre for Development (発展のための演劇)の活動を主に視察した。

創設者のCecile Guidoteが1967年に卒業論文で書いた“A Prospectus for the National Theatre of the Philippines (フィリピン国立劇場設立計画)”というビジョンを元に立ち上げ、それまで外国語の戯曲上演が主だったフィリピンの演劇界において、タガログ語で書かれた独自の演劇を作り出していった。Guidoteはマルコス政権時に反政府勢力として反対運動に大きく関わり、ラモン・マグサイサイ賞を1972年に受賞した直後アメリカに亡命。PETAの演劇をツールとしたアドボカシーワークショップは、ヴィオラ・スポーリン、パウロ・フレイレ、アウガスト・ボアール、ベルトルト・ブレヒトなどの影響を強く受けながら、フィリピン社会において独自の発展を遂げた。日本とも黒テントや、国際交流基金を通して長く関係があり、現在でも多くの日本の演劇人やワークショップファシリテーター、教育機関がPETAとの交流を行なっている。



上：40周年記念に創作された劇団の歴史を描いた絵画 PETAセンター
下：ラモンマグサイサイ賞2017 授賞式の様子 CCP

・受入協力者 1：Ian Segarraについて

今回の受け入れ協力者・インターンコーディネーターであるIan Segarra (イアン・セガッラ) は、フィリピン国立芸術高校に在学中からPETAの活動に参加。2011年には俳優として Philstage Gawad Buhay で最優秀賞を受賞。2015年、山口が演出助手を担当した、りっか＊りっかフェスタ (沖縄) の共同制作「小さな紳士」へ俳優として参加したことから交流が始まる。PETAのシニアアーティストティーチャーとして、現在はワークショップ、PETA内外部の演出、出演に加え、国際共同制作など、活動の場を広げている。PETAの初期メンバーが少なくなっていく状況の中、他の若い世代のPETAのアーティスト同様、これからどのようにPETAの精神と伝統、組織を維持しながら、自分たちの新しい表現と活動を作っていくかを考えているようだった。「小さな紳士」に参加後も、日本やヨーロッパとの国際プロジェクトに関わっている彼は、各地で得た経験をPETAに還元しながらこれから大きく成長していくフィリピンのアーティストだろう。

・受入協力者 2：Ralph Cabinta Lumbres について

PETA外の活動を広げるに当たって、重要な役割を果たしてくれたのが現地で知り合ったRalph Cabinta Lumbresだった。ラルフはマニラを拠点とする劇団Sipat Lawin Ensembleのプロジェクトに関わっている彫刻家で、同劇団のメンバーを通して知り合った。Sipatのメンバーが私の滞在中にオーストラリアに渡航していたため、交流が十分に取れなかったが、代わりに彼にマニラの現代美術のアーティスト、こども博物館、ライブハウスや、フィリピン大学内の先住民キャンプ、トンドで活動する吉本興業のHPN3などを紹介してもらった。また、彼の参加しているHANDS! プロジェクト (後述) のイベントに参加できたことも、フィリピンでのPETA以外でのワークショップの様子を見るいい機会となった。

II PETAのワークショップ

研修中に見学した内の3つのワークショップ（Lingap Sining Project、Weekend Workshop、Artzone Project）、またHANDS!プロジェクトのイベントの様子や、山口が現地の人に開催したワークショップについて。

1. レイテ島での活動 Lingap Sining プロジェクト (8月12日～17日)

・Lingap Sining プロジェクトについて

PETAが2014年からレイテ島で行なっている、Lingap Sining (芸術による心の育成) プロジェクトの活動に8月12日～17日に同行した。PETAは2013年11月に起こったスーパー台風「ヨランダ」によって大きな被害を受けたタクロバン市を中心に、被災者 (survivorsと呼んでいる) に向けて、演劇を含むアートを使った人々への心のケアや、コミュニティにおけるの災害リスク削減 (DDR: Disaster Risk Reduction) を継続して行なっている。



ワークショップで書かれた絵 (PCAO事務所)

このプロジェクトの企画運営をし、今回私の担当をしてくれたGail Billones (ゲイル・ビロン) はPETAに80年代後半から関わりながら、近年ではこどもの人権を守るキャンペーンArts Zone Projectと、このレイテ島での活動を行なっている。PETAメンバーはヨランダ以前から、レイテ島パロ地区で高校生への演劇教育をするためにマニラから通っていたが、2013年ヨランダ以降、既に関係を持っていた高校生達 (台風当時は高校を卒業していたメンバーもいた) と一緒に、このLingap Sining プロジェクトを継続している。

台風直後に現地に入ったメンバーは、被災した人達と演劇のワークショップを開始した。安心できる関係を作った後に、台風当日のことを再現する即興のエクササイズをしたところ、記憶の鮮明さから泣き出し即興を続けることができない人達も多かったそう。心的外傷が癒えて行く過程は様々だが、安心できる環境で他者に経験を伝え、そしてその経験を芸術として昇華させていく過程で”resilience (抵抗力)”が養われていく。精神科医とも協力しながらワークショップを何度も重ねて行く中で、参加者たちは言葉を発し、同じ恐怖を体験した人達と共有して行くことによって、悲しみを生きる力に変えて行ったという。ゲイルは「芸術を作ることを通して、災害の”victims (被害者)”ではなく、”survivors (生き残った人)”に彼らはなっていく」と話す。2014年にはPETAと現地の若者のグループ Palo Cultural and the Arts Organization (PCAO)が協働で制作した演劇作品「Padayon!」が上演され、生き残った人々の物語に光が当てられた。



写真集 *Hayan the aftermath* Lucien Y.Letaba より PCAOのパフォーマンス風景

このプロジェクトを通してPETAは「地域のあらゆるセクターにおける、安全や防災、減災に対する習慣や考えを、それぞれのコミュニティの暮らしに合った形で変えて行き、台風のような起こり得る災害に対して普段からどう備えるかコミュニティが自立して考えられるようになることを目指している。」 (*Hayan the aftermath* Lucien Y.Letabaより抜粋)

・8月12日 Young Artists Convergence のレポート

8月11日PETAセンターでのオリエンテーションを終えて、翌朝午前3時には飛行機でレイテ島へ移動。8月12日はPETAが主催する、タクロバン市周辺地域で舞台芸術活動する若者（中学生～20代前半）たちの集会に参加。この地域で舞台芸術活動をしている若者たちを交流させ、情報交換する場を設けることで、今後彼らが自主的に協働することを促す。

午前中はPETAのゲイルとラウルのファシリテートによるゲームの連続。一気に会場の空気を温める。一緒に早朝の飛行機で来て、ほぼ睡眠を取っていないはずのゲイルのパワーに驚くが、同時に参加者のエネルギーの高さ、明るい雰囲気、に圧倒され、フィリピンの国民性を感じ取る。ゲームは、定番の名前ゲームやグループ作りゲームから始まるが、ルールに慣れてくるとどんどん演劇的な要素（感情や、シュチュエーション）が足されていき、単純なゲームだったものが自然に「演技すること」「状況を作ること」に変わって行く。ゲームを通して主導権が参加者へ徐々に渡されて行くので、最初はファシリテーターに誘導されていた参加者が時間が経つにつれてどんどん主体的になっていった。

午後は参加グループのプレゼンテーションが行われる。それぞれの普段の活動を実演したり映像で発表する。圧倒的にダンスのグループが多い。その後、DRR（Disaster Risk Reduction 災害リスク削減）のレクチャーが行われる。レクチャーの後は、台風によって自分が受けた影響を一つの絵で表すワーク。各々の絵をグループで持ち寄り、コラージュにして一つの大きな絵にして、更にそれを元にパフォーマンス形式でプレゼンをする。かなり制限された時間の中で、アイデア出し、グループでビジュアルとして一度まとめ、そしてパフォーマンス形式へ変換しての発表、という流れが行われた。もちろん、中にはシンプルなものもあったが、発表で表現された内容よりも、10代の初めて会った若者たちが自分の意見を言い合い、まとめ、協働してパフォーマンス形式で表現したという事実に興奮した。

最後には災害時におけるアーティストの役割が話し合われ、発表された。ワークショップの様子を見たり、レイテ島での台風被害の大きさについて聞くのも初めてで大変貴重な経験だったが、現地の10代20代の若者たちが自分自身を「アーティスト」と呼び、「アーティストとして社会のために何が出来るか」を真剣に問うていることに何よりも驚いた。



Young Artists Convergence、シアターゲームの様子



ヨランダで経験したことを話し合い、モンタージュを作っている

当日のワークショップの流れ：

- *イントロダクション
- *シアターゲーム
- *動きのエクササイズ
- 昼食
- *各グループの紹介・発表 前半
- DRRのレクチャー

- *ヨランダの影響を絵に描く
- グループでモンタージュを作る
- パフォーマンスにして発表
- *各団体の紹介・発表 後半
- *DRRでアーティストが出来ることをディスカッション
- 表にまとめて発表

・8月15日～16日 レイテ島での交流ワークショップ

8月15日、パロ地区のブラスバンド部へのワークショップを行なった。このブラスバンドはヨランダの後に市長の声かけで結成された。市から楽器が与えられ、交響楽団の人が指導に来てマニラの文化センターでも演奏をするなど、ヨランダ後の地域の若者たちの文化活動の場となっている。CCPで演奏した時のことを「夢のような気持ちでした。」と興奮して話す様子を見て、自分の可能性を感じられる経験することが生きる力や希望になるのだと実感する。



ブラスバンド部とのワークショップの様子

二時間あまりのワークショップでは、自分と日本の紹介、参加者のみんなの紹介、シアターゲーム、そして目を瞑ってペアで動くエクササイズを行った。ブラスバンド部なので、動くことにはあまり慣れていないと聞いていたけれど、みんな目を閉じながら動いたり、相手を誘導しながら一緒に部屋の中を動く体験を新鮮に楽しんでくれていたよう。最後にはお返しの演奏をたっぷり楽しんだ。



ワークショップの後SATOの影絵の仕組みを見せてもらう

8月16日はパロの影絵グループSATO (Shadow Arts Theatre Organisation)との交流ワークショップ。会場は、SATOの稽古場でもある地域の公民館。前日と同様お互いの紹介をした後、ゲームとエクササイズを行う。映像で見てレベルの高い表現をしている団体だと知っていたため、前日より少しダンスの要素の強いワークを選択する。中には初めて身体表現を経験する子もいたようだけど、皆んなクーラーもない部屋で真剣に最後まで取り組んでくれた。その後、SATOによる影絵を鑑賞。細部に工夫が施されたレベルの高いパフォーマンスは圧巻で、環境問題や世界平和がテーマとなっている2分ほどの影絵を2本。「なぜこのテーマにしたの？」と聞くと、「これが僕らの周りで起こっていることだから。」と言う返事に、知ってはいたのに聞いてしまった自分とこれら

の問題との距離を知る。彼らの暮らしている世界と私が認識している世界の違いを感じる。

数日だが、PETAのワークショップや活動を見学した後に、今度は自分がワークショップをすることになり、一体このエクササイズを通して今回彼らと何を交換できるのだろうか、と考えてしまう。今まで俳優やダンサーのためのワークショップを経験して来た自分が今提供できるのは、限りなくレッスンに近いワークショップだけだと改めて自覚。今回は現地で決定した「交流」がメインのワークショップだったので、お互いを知り楽しい文化交流の時間を過ごせたことで目標は達成できたが、自分の中でワークショップの在り方について改めて考えるきっかけとなった。



左：パロのブラスバンド部
右：影絵のグループSATO

2. PETA Weekend Workshop (8月18日～20日)

マニラに戻り、PETAが7月から毎週末開催しているワークショップの稽古と発表を見た。一般の参加者が3つのグループに別れて、マニラ市内の刑務所、スラムなどに出かけ、そこで見聞きしたことを演劇又はミュージカル作品にするプログラム。舞台経験の無い人も含み、10代後半～60代の幅広い層が参加していた。舞台未経験の人たちでも、外に出て普段接する機会のないコミュニティについての作品を作るところがPETAならではの。ワークショップに参加している彼らにとっても刑務所やスラムに行くことは大きな経験になったと言っていた。列車の線路を使って、自作のトローリーをスラム内で走らせ収入を得ている人たちのこと、騙されて不当に刑務所に入れられている人たちこと、貧しさからどうしても盗みを働かないといけなかった少年たちのこと等が語られていた。それらの厳しい暮らしの中に、生きる楽しさ、愛、家族の繋がりなどがエネルギーいっぱい描かれていた。実際、スラムや刑務所に私は行くことができなかったの、彼らが舞台上で上演する演劇を通して、フィリピンの社会の一部を見ることができた事を考えると、演劇が社会で担うことのできる役割は大きい。

3. ARTS Zone Project for Childrenの活動 (8月24日～8月25日)

・ARTS Zone Project for Children について

PETAは2009年からARTS (Advocate Right to Safety) Zone Project for Children (子どもの権利を保護し、子どもを暴力から守っていく、アートを通しての活動)を行なっている。フィリピンでは現在でも体罰がしつけとして一般的に行われている状況があり、このプロジェクトでは「フィリピンの子どもの尊厳と権利を持てるような社会になるように、演劇を含むアートを通じて、子どもに影響を及ぼしている深刻な問題に対する意識を親、教師などの大人に対して高めて」いる。(ARTS Zone のパンフレットより) こどもに対しての身体的、精神的、性的虐待を無くするための教育や、都市部の貧困で生まれている恵まれない子どもたちへのワークショップも行なっている。



上：ワークショップの様子 お互いの「良いところ」を背中に書いている

・8月24日～25日ワークショップ レポート

8月24日、25日はArts Zone プロジェクト(Advocate Right To Safety Zone Project for Children) のワークショップに同行。パシッグ市にあるKaibigan Foundationというストリートチルドレンや、法に抵触した恵まれない子どもたちを保護する施設で開催された。

今回のワークショップ参加者の中には犯罪を犯して現在調停中の子どもがいると聞いていたので、始まる前は少し緊張した雰囲気が漂っているように感じたが、いつものように、シアターゲームから始まると他のワークショップの子どもたちと変わらない様子で楽しんでいた。ゲームから、タブロ、人間彫刻や、詩を書くワーク

ショップを通して自分たちが置かれている状況や、今の自分について表現、発表していく。タガログ語で行われるワークショップだったので、内容は一部しか分からなかったが、「両親は自分にとって太陽のような存在で、朝起きた時には必ず両親の顔を見たい。」と子どもらしい素直な発言が出ていた。それを聞くと同時に、彼らがこの施設に保護されないといけない現状の厳しさを感じた。自分たちの置かれた状況を演劇の手法で表現した発表では、先述の週末ワークショップの参加者の演技では見ることの出来なかった、実体験に基づいた緊張感のある身体や言葉に強く心を動かされる。PETAのマリチュウの話によると、彼らの中には貧困状況で親から虐待を受けて家を出て、仕方なく犯罪を犯してしまう子どもも少なくない。2日目の最後には、将来に向けて自分がどう成長していきたいかを人型の紙に書いた。

当日のワークショップの流れ：

1日目

- *イントロダクション
- *シアターゲーム
リリースエクササイズ
- *エクスペクションチェック
- *動きのエクササイズ
- *ヴィジュアルアート（私について）
- *自由詩

2日目

- *タブロ
- *自由詩続き
- *衣装、小道具作り
- *シーン作り
- *発表
- *将来的な考え（他者へ何が自分ができるか）

4. HANDS! プロジェクトイベント(8月26日)

8月26日、マニラを拠点とする劇団Sipat Lawin Ensembleを通して知り合ったRalphに誘われて、彼が参加しているHANDS! プロジェクト（国際交流基金アジアセンター主催）のフィリピンチーム主催イベントに参加する。当プロジェクトについて、またDRRについても知らなかったため、KIITOの「イザ！カエルキャラバン！」等日本でもこのような防災教育が行われていることを知ることができた。ワークショップ参加者は学校の教員たち。HANDS!プロジェクトを通して、アジアの各国で学んで来た防災・減災教育を伝えていた。

ゲームや絵画の手法を取り入れて、色々な角度から防災教育や環境教育ができる可能性を知る。このイベントに参加したことで、ワークショップという形式がいかにフィリピンの社会で馴染みのあるものかも理解する。少しの照れはあるものの、日本ではこうはいかないのでは？と言うようにみんなよく動き、よく発言していた。ワークショップの後にミンダナオ島からの参加者と話す機会があり、ミンダナオ島のこと等、現在のフィリピンの政治状況を聞いた。

5. 現地で行ったワークショップ報告2 (国立芸術高校、PETA)

・8月30日 国立芸術高校でのワークショップ

8月30日、イアンの出身校で、彼が現在非常勤講師を務めているマキリン国立芸術高校で生徒にワークショップを開催。車でマニラから1時間少し、自然の深い山の中に建つ全寮制の芸術高校は、噂には聞いてはいたが圧巻だった。

学校の敷地内を案内してもらった後、イアンのクラスの生徒(中学生～高校生)とムーブメントのワークショップを行う。

レイテでも行った目を瞑ってペアで動くエクササイズから始める。流石はエリートとだけあってみんな勘がよく、一つ指示を出したら何倍にもして反応していた。その後は即興の動きのエクササイズに発展して行く。上級生たちは今は戯曲の解釈、キャラクター構築の勉強をしている時期なので、こういった体を動かすエクササイズは久しぶりで楽しんでいた。一年生は初めての子も多く、新しい発見が多かったと語ってくれた。「フィリピンの舞台芸術の未来を担っている子達だから。」と言うイアンの言葉に、みんな少しばかり気恥ずかしさやプレッシャーを感じていましたが、確実にこの中から次世代の優秀な俳優が生まれるのだらうと希望を感じた。



上下：国立芸術高校、演劇コースでのワークショップの様子

・9月8日 PETAセンターでのワークショップ

出発の前々日の夜、PETAセンターでPETAのメンバーに向けてのワークショップを開催。参加者はPETAの若手メンバーと、イアン、見学者のBong、Gailの合計9名。

ウォームアップ後、試験的に考えたゲームを実施する。3種類のカードを配り、黄色には「フィリピン人は・・・」緑には「日本人は・・・」ピンクには「人は・・・」に続く、それぞれのイメージ、知識、(あえて)ステレオタイプ、を書いてもらう。その後、フルーツバスケット(と大阪では呼んでます)の要領で、円の真ん中にオニが入り、カードをランダムにひく。カードに描かれている文章の主語を取り「・・・な人!!(Change your seat if you are.....!)」と読み

上げる。該当する人は、席を移動する。(例:「フィリピン人はすぐ笑う。」と書いたとすると、オニは「すぐ笑う人!!」と読み上げ、それに該当する人は誰でも席を変える。)席が取れずに余った人が次のオニ。



PETAセンターでのワークショップの様子 ゲームを説明している

ゲームを通して、参加者の考えたそれぞれの印象が交換される。同時に紙を色で分けていたために、どの質問がどの人種について書いたものか目でみる事ができた。その紙の色と、実際に動く人が必ずしも一致しておらず、私たちがあがるグループを区別する時の条件みたいなものは主語を取り除けば、曖昧になるということを感じれた。一体私たちが私たちがたらしめている(と思っている)ものは何なのか、ということを考えるきっかけにならないだろうか、と考えた。考えたゲームはここまでだったが、ここからどう発展する可能性があると思うかPETAのメンバーに聞いたところ、どのカードが一番印象に残ったか、またその理由を聞く。そしてPETA的な発展をするとしたら、カードを元に演劇のシーンを作ったりするだろう。と話してくれた。

次にやったのは記憶のワーク。自分の好きな場所を目の前に見て、見えるものを体でなぞりながら歩く。次に、そこを歩きながら見るものを全て言葉にして出す。パートナーはその言葉を書き留めておく。もう一度、その場所を歩くが、その時に外から他の人が先ほど記録した言葉を言う。動く人は、それらの言葉に反応してもいいし、反応しなくてもいい。体が持つ膨大な空間に対する記憶と、言葉によって振り付けさせられるというエクササイズ。どれだけの場所の記憶を私たちの体は貯蔵しているかを共有した。



PETAセンターでのワークショップの様子 記憶のワーク

最後に私の短いパフォーマンスを披露。ルーパーを使ったソロパフォーマンス。言葉を重ねていくことで景色を作りながら再生しその中を動く。既存のパフォーマンスに、フィリピン滞在中で得た風景の描写や、音を入れる。その他、振り付けの中に、戒厳令の歴史や、現在の薬物取り締まりの状況などフィリピンの歴史と現状を聞いて新しい部分を加えた。

パフォーマンスの後話す中で、PETAで活動をしていると、どうしても自分一人で作って自分一人で演じるという状況にならないため、若い俳優の一人は「PETAとしてのクオリティにどうしても縛られている自分があるが、個人のアーティストとして、もっと実験的な試みをして行きたい。」と語っていた。団体を継続し

ていくことと、一作家としての間で葛藤があるようだった。上の世代の俳優たちもその意欲をどうやってPETAに上手く反映させていけばいいかを話し合っていた。

6. PETAのワークショップにおける教育について

Education という言葉を聞くと、どうしても「教育」という日本語をあてはめてしまう。研修当初、PETAのワークショップや活動を見聞きしていて、疑問として感じたことは「どうやって正しいことを教育、提唱し続けられるのか？自分たちが正しいと信じていることが、どうして対象の人たちにとっても正しいと確信を持つことが出来るのだろうか？」ということだった。正義というものは、信じる人にとっての正義である。社会の中で大多数の人が「間違っている」から、「教育」の必要があるのだろうか？そんなにも多くの人が「間違っている」中、どこでどうやって、PETAはその正しさを手に入れたのだろうか？と、なんだかそんな元も子もないことが頭からどうしても離れず、PETAの俳優 Bong に質問をした。返ってきた答えは「私たちの意味する教育というのは、人間の価値を認めるということ。PETAは何かを教えているのではなく、人が批判的にそして創造的になれるための機会を提供しているだけ。」だった。「なぜ間違うことを恐れないかと聞くと、「人を信じているから。人にはそれぞれ宿命のようなものがあり、もし人がある方向に行きたいと感じているなら、それを信じるしかない。人に何かを押し付けることはできない。私たちは自由になるように訓練されてきたから、他者が自由に考え、表現し、振る舞うことを容認する。だから自分たちのことをファシリテーターと呼んでいる。例えばPETAがレイテ島で行ったことは、PETAだけでは遂げることができなかった。コミュニティのそれぞれの役割の人が協力したからこそ、レイテ島のプロジェクトは成功している。ある意味ヨランダですら、PCAOや SATOが成長する要因になっている。PETAはプラットフォームを提供しているだけなんです。」と語った。なるほど、となんとなく理解しつつ「Education / 教育」について自分の固定観念を払拭するには時間がかかりそう。

PETAのワークショップを何度かみて行くうちに、一番印象として残ったのが「それでは、これからどうしていけばいいのか？」という問いかけがいつも最後にあることだった。

台風の被災者、ストリートチルドレン等、災害または社会的状況により、厳しい状況にある人たちへ、PETAはワークショップを通して心の内や本人の状況を表現し消化する機会を作る。それを繰り返すことによって、彼らは「resilience 抵抗力」と生きる力をつけ行く。しかし、そこで終わるのではなく「それでは、同じことが起こらないようにするには一体どうしたら良いか考えましょう。」と問いかけるのだった。直接的な言い方をすれば、PETAのワークショップではいつまでも弱者としてのステータスに留まることは許されない。自分の経験した苦しみを理解し、抵抗力を獲得できたのであれば、次は自分のような人が出ないようにしなければならない。そうすることによって、未来へと進むことができる。しかし、そうするにはどうしたらいいか？一見、短いワークショップで達成するには酷に感じられるプロセスだが、参加者は想像以上に喜んでその「与える側」として考え、振舞っているように見えた。もちろん、全てはワークショップの中なので、何か具体的な社会行動を起こしている訳ではないけれど、初めは社会の中での弱者として位置付けられた彼らが、最後には他者を助ける立場として振舞っているのを見て、これが束の間の「虚構」だったとしても、この体験はいつか現実の世界でふと顔を出して、行動するきっかけを与えるのかも知れないと、希望を感じた。



左: 将来的なビジョンを考える人型のシート
中央: アーティストとして何が出来るか考える
上: 実体験を元にシーンを作る

III フィリピンの社会

今回の滞在中で自分のリサーチ範囲内外のフィリピン社会について知る機会を得た。日比の戦前戦後を通しての繋がり、貧困について、環境問題、そして過去と現在における戒厳令や薬物取り締まりについて等、日本ではニュース程度に聞いていた事柄を肌で感じることができた。

1. 日本とフィリピンのつながり、日本への移民について

滞在中、アジアフェローのMichelle OneさんとMelvin Jabarさんへのインタビュー、またトンド地区への訪問、DAWNの事務所への訪問を通して、日本とフィリピン間の人々の移動とその状況を視察した。

・Michelle Ongさんへのインタビュー (8月21日、9月4日)

8月21日、去年アジアフェローとして日本に滞在していたMichelle Ongさんにお話を伺う。自分が京都に住む移民の二世、三世の若者についてリサーチしたいのに対して、彼女は移民の高齢化を取り扱っているため、同様のコミュニティを老いの視点(人生を終えて行く過程)で見つめている彼女の話は非常に興味深かった。多くの資料と情報をいただいた。9月4日にはフィリピン大学の研究室を訪問した。Michelleさんが語るに、インタビューは彼らのした人生の決断(日本に移住し、そこに留まること)に対して自分や周りにとって「Make sense(意味が通る)」するように振舞っているように見えるようだ。海外で移り住む時、初めは経済的理由や、留学、結婚など具体的な動機があることが多い。しかし、その動機は決して長期に渡って継続するものではなく、常に移り変わる状況に対して、移民の前には留まるか否かの選択が差し出されている。それを前に人は理路整然とした決断をできるのではなく、経済的な理由、土地への愛着や人間関係など、移住国との間に出来た複雑な関係から、その時その時で彼らは人生を決断して行く。その決断を後から肯定するように、彼女たちは自身の人生を矛盾も孕みつつ「Make sense」しながら、語っているように見られるという。私も移民の物語を取り扱う際、合理的には説明できない人と土地との常に揺れ動く関係や縁を描きたいと考えているため、研究者からこのような話を聞いたことは貴重だった。

・DAWNへの訪問(9月6日)

9月6日、DAWN (Development Action for Women Network) の事務所を訪問した。代表のCarmelitaさんにDAWNの活動内容を聞く。鈴木勉さんの「フィリピンのアートと国際文化交流」にも情報が載っていた、JFCと創作し現在も毎年日本での上演を続けている「クレインドッグ」についても説明してもらおう。PETAは活動当初パートナーだったようで、現在もPETAから受け継いだワークショップの手法を取り入れて、JFCや日本から帰国した女性たちと共に演劇を作っている。京都大学から研修でDAWNを訪れることもあり、京都大学の教授で京都市でフィリピンルーツの子どもたちに学習支援をしている先生をご紹介頂いた。帰国後、連絡をして既に交流が始まっている。



DAWNの事務所 織物を作り販売している日本からの帰国者

・トンドへの訪問(9月2日)

9月2日、Ralphと武田力さんの紹介で知り合ったよしもと興業のHPN3(ハボンズリー)の堀越さんに、ホームステイ先のトンド地区を案内してもらおう。ホームステイ先のお母さんも、日本でしばらく働いていたそう。福知山にもいたらしく、流暢な日本語が話せる。15人の家族が一つの家に住んでいる。お昼ご飯を頂いた。トンドは聞いていたよりも、危ない感じはなかったが、人、特に子どもが多くて活気があった。PETAの週末ワークショップの発表で見たビンゴを道端でおばちゃん達がやっていた。京都で私が交流のある女性が育った地域ということで、写真を撮って彼女に送ったら「懐かしい」と喜んでくれた。トンド地区では、日本に行っていた女性が多数いるらしい。



マニラ、トンド地区を歩く

Divisoriaという巨大な卸市場のようなマーケット行く。スリが怖くて一枚も写真が撮れなかった。堀越さんはマニラで活動を続けていて、コメディショーなどに出演させるなど活躍されている。その他、空手家やオムライス王子などフィリピンで活躍する日本人の方々の話を聞いた。

2. 戒厳令と現在の状況

・PETAのミュージカル「A Game of Trolls (GoT)」を鑑賞 (9月2日)

「GoT」はエドゥッサ革命*で活動家として戦っていた母親を持ち、自分は秘密でトロールとしてマルコス派に有利な情報をインターネット上に流す事で収入を得ている息子ヘクターの物語。ネット上のクラウドの中から、革命で命を落とした英雄たちの魂が現れ、当時何があったのかをヘクターに語る。革命を知る世代と、ミレニアル世代のギャップやすれ違いを経て、心の内を話すことでお互いを理解していく様を描いたミュージカル。

演出のMaribelは10代～ミレニアル世代の若者に見て欲しいと考え、SNS、プロジェクトマッピング、音楽フェスなど若者に人気のポップカルチャーを多く盛り込んだ。劇の終盤、親マルコス派と革命家たちがラップでバトルするシーンでは、プロのDJを主役に起用しているため、観客も巻き込んだまるで演劇と思えない白熱したバトルになった。

*エドゥッサ革命：1986年2月、21年間続いたマルコス政権に民衆が反対し、マルコスを追放し民主化を勝ち取った。

・戒厳令資料館を訪問 (9月6日)

9月6日、ケソン市クバオの近くにあるTask Force Detainees of the Philippines (TFDP) という団体が運営する戒厳令資料館に行く。TFDPは人権を守る団体として、1960年代のマルコス政権下から活動を開始。博物館には当時の人たちの証言を記録した資料や、写真が飾られている。

3. Sipat Lawin Ensembleのメンバーとの交流

・Sipat Lawin Ensembleの事務所訪問 (8月23日)

8/23、去年と今年と沖縄で会ったNess、イアンの妹のAlonが所属するSipat Lawin Ensemble の事務所を訪問した。残念ながら主宰のJKはオーストラリアに渡航したため会うことは出来なかったが、他のメンバーから新作や彼らのフェスティバル、Karnavalについて話を聞く。新作は、こども向けに作られた宗教問題を扱っている。家一軒丸々使い、家の中を歩きながら子供たちに異なる宗教について知ってもらう作品。まだ試作中で、これから発展させていくという。世代や時代背景が違うために表現形式や団体のあり方、行動の起こし方は違うと言えども、社会を変革する行動としての演劇という点は、PETAと通じるものがある。

・先住民 Lakbayan Camp 参加 (9月4日)

9月1日～22日にかけて、フィリピン全土から集まった先住民の人たちがフィリピン大学構内で抗議キャンプを開催していた。フィリピン大学の学生にキャンプ内を案内してもらう。2015年にミンダナオ島のディアトゴン村で、オルタナティブ・スクールを運営していた教師3人が襲われたことをきっかけに、先住民の苦境を伝えるために、このLakbayan camp が同年から首都マニラで始まった。今年で3年目になる。先住民の人たちによるスピーチや、ライブを聞いて、彼らが生産している美しい織物や、工芸品を数点購入した。



Lakbayan Campの様子

IV リサーチを終えて

まるで初めて国外に出た時のように出会うこと一つ一つに心を揺り動かされた一ヶ月だった。フィリピンで見た景色を通して、豊かさや貧しさ、そして東南アジアにおける日本の位置、演劇が社会で出来ることについて考えを巡らせることになった。

一見、日本に住む私たちと同じように、若者は誰もがスマートフォンを持ち、H&Mなどの世界共通のファッションをし、Facebookで繋がり、アニメの話をし、K-POPに夢中になっているフィリピン。しかし、友人の家を訪れると壁はトタン作りで隙間だらけだったりする。高層マンションのすぐそばにはスラムがあり、高級車の窓を勝手に子どもが洗浄して収入を得ようとする。数百円で食事ができると思えば、ショッピングモールの中はグローバルスタンダードの価格で気が滅入る。通りを歩くだけで、貧しさや豊かさの矛盾が混沌としたヴィジュアルとして私の目に飛び込んでくる。見なければ考えずに済むであろうことも、見えてしまうのだから考えてしまう。そして、その景色の中での自分の位置を考えざるを得ない。

一方町のエネルギーは凄まじい。交通渋滞が深刻な問題となる程、通りは人と車で溢れているし、とにかく印象として子どもや若者が多い。道端で笑ってダンスの練習やバスケットをする子どもたち。そして、家族の繋がり。何世帯も同じ家に住んでいる。色々や問題もあるだろうけど、私の世代以降日本ではあまり見ることのできない家族の在り方がまだあるように感じた。日本では多くの人が孤独を抱えていることを考えると、豊かさとは一体何かと問わずにはいられなかった。

ヴィジュアルとして分かり易く飛び込んでくるフィリピンにおける問題たち。目の前に広がる、山積みの問題を見れば誰だって何かをしなれば、と思うかもしれない。PETAのメンバーをはじめ、滞在中に多くの若いアーティストに出会ったが、社会問題を扱っていない人は誰一人としていなかったように思う。どんな作品であっても社会的なものであるのだけれども、フィリピンで過ごしていると、日本には問題がないような気になってしまった。いやいや、あるだろうと思ひ直し、それでは、あるけれど豊かさで隠されているのだろうか？と考える。しかしやはり、問題が隠れているというよりは、こちらの問題を見つめる視力が弱いのだ。幽霊のように見えない問題たちが私たちの体をどこか重くしている。のだろうか？道路一つ渡るのも命がけのフィリピンで、私は沢山の物語に出会い、心を揺さぶられ、恥ずかしながらも「人間にとって真に大切な物とは何か？」を問うことの重要性を再認識させられた。

近年、東・東南アジア、日本国内では沖縄に赴くことが多くなり、その度日本が行ってきた支配の歴史に向き合うことになる。どうやってもそれらの物語を避けて通るのが難しい。今回もレイテ島やマニラで、支配者としての日本人の記憶と、近年のアニメや日本文化の影響からくる親日イメージの間でドギマギした。レイテの人々にレイテ島で日本軍が行ったとされる侵略について聞いた後、私が「今回自分が気がつかないだけかもしれないが、日本人であると言って拒否されることはなかったように思う。」というと、「過去のことだし、日本は私たちを台風の時に助けてくれるからね。」と言っていた。支配も人手助けも個人的にはしていないために、そういうものが「日本」として自分に繋がりを見せる時、いつもどう応答すればいいか戸惑う。ともすれば不本意とさえ感じる繋がりを通してでしか、社会で起こっている（起こってきた）ことを実感することはできないのかもしれない。様相を変えてはいるが、現在のフィリピンと日本間の移民問題について触れる時もふと似た感覚を覚えることがある。

今回、滞在中一部ではあるがフィリピンの社会を見、歴史を知ることによって、どうしてPETAのような劇団が出来たのか以前より理解できた気がした。彼らの勇ましい姿に、日本をはじめとする世界中の人たちが背中を押してもらっている。Raulは50年PETAが続いている理由を「未だにフィリピンが私たちの望む理想の国からほど遠いから。」と語る。フィリピンの抱える問題は、これからの10年20年で一掃されるとも思えない。PETAの精神が無くなりさえしなければ、PETAのすべき仕事は次の50年あるように思える。日本で活動していく私も、ここで使われる「Education」とは何なのかを考えながら、視力を高め「沈黙の文化 Culture of Silence」を打ち破る一助となるような演劇作品を作りたい。

V 今後のプロジェクトについて

2017年からBRDGは外国にルーツを持つ子どもたちについての演劇作品を京都で作るプロジェクトを開始している。京都市内で月に一度開催されている、海外にルーツのある子どもたちへの学習支援会に参加するなど、フィリピンルーツを持つ子どもたちや、その母親との交流を行いながらリサーチを進めている。また、Michelle Ongさんの紹介で東大阪の学習支援の会に参加したり、DAWNの紹介で繋がりのできた京都大学が週に一度行っている学習支援への参加や、彼らが入っている京都市内の小学校との協力の可能性なども帰国後出てきている。当初に予定していたよりもコミュニティとの関係の構築には時間がかかるが、フィリピンへ研修に行ったことによってできた新しい繋がり、PETAで見聞きした経験、知識を生かして、時間をかけて京都の子どもたちや支援団体との交流を深め、彼らのニーズを聞いていきたい。今後表現の場としての演劇ワークショップを開催していく予定だが、若い人たち、特に言語の制限がある子どもに、自分たちの状況や感じていることを言葉にして表してもらおうことの難しさは出てくるはずなので、演劇だけでなく、ダンス、美術や音楽など、非言語で表してもらえらる方法を模索しながら、コミュニティへのサポートと創作の素材の収集を目指していく。PETAでのインターン最終日にはBRDGとイアン、PETAとの将来的なコラボレーションの可能性も話し合われた。まずはイアンを京都に招聘しPETAのワークショップを行ってもらおうなど、小さな機会を設けていくことから始められたらと考えている。外国人移住者がますます増えていくとされている中、このような活動を通して、日本の文化や現在の日本社会に適した演劇ワークショップの手法の開発を進めたいと考えており、さらなる研修や、教育機関との協働なども視野に入れて活動を行なっていきたい。

上記のように、今プロジェクトは中長期的にコミュニティとの関係を築きながら進めて行くと同時に、ワークインプログレスを繰り返し作っていくことで、リサーチと創作の両立を目標とする。その第一弾として、これまでのBRDGの活動と今回のフィリピンでのリサーチを経て、2018年3月に「Whole」と題してOHP（オーバーヘッドプロジェクター）を使ったビジュアルアーティストの仙石彬人氏を招き、一人芝居を演出する。

BRDG演劇公演「Whole」～はんぶんでも、ニバイでもなく、一個のWhole～

日時：2018年3月16日（金）～18日（日）会場：studio seedbox

演出：山口恵子、出演：柳沢ゆりあ、OHP：仙石彬人

*詳細は特設ページを参照ください <https://brdg-whole.tumblr.com/>
